

令和7年度 第2回 埼玉県生涯学習審議会 会議録

1 日 時 令和8年3月30日（月）15：00～16：45

2 会 場 オンライン開催（Microsoft Teams）

3 出席した委員（12人）

谷野裕子委員、土澤貴弘委員、羽生田奈々絵委員、前川康恵委員、岡野啓子委員、久保木則子委員、山口純子委員、関根公一委員、宮崎吾一委員、森玲奈委員、山崎雄一委員、山本和人委員

4 欠席した委員（7人）

鈴木美幸委員、菅野雅亨委員、春山綾子委員、二葉薫委員、大石克紀委員、小船隆一委員、新保正俊委員

5 委員の紹介

新たに任命した委員の紹介

7 副会長の選任

副会長は宮崎吾一委員が選任された。

6 議事の経過

（1）会長の開会宣言

（2）会議の成立

委員12名が出席し委員総数19名の過半数に達したため、埼玉県生涯学習審議会条例第6条第2項に基づき、事務局が審議会の成立を報告

（3）会議の公開・非公開

会長が会議の公開・非公開を委員に諮り、公開とする。
傍聴者なし

（4）会議録署名委員の指名

会長から山口純子委員と関根公一委員が指名された。

（5）議題及び経過

ア 議題

- 誰もが学び続けられる生涯学習社会の実現について

イ 経過

(議題) 審議テーマと論点、県政サポーターアンケートの自由記述について事務局より説明

- 会長
今回も前回同様、第2回会議の論点「誰が学べていないか」「どうすれば学びに参加・継続できるか」「誰が支えるか」「どこから始めるか」「共通視点の妥当性」について議論する。共通視点の設定は重要だが、「誰が」によって特殊な例も多く、生活多様化の中で共通点を見出しにくい部分もある。しかし、この違いを考慮することが、共通視点の明確化につながるだろう。特定の論点に集中せず、皆さんの考えや質問を広く議論したい。県民アンケートの結果も踏まえ、各自の経験と結びつけて発言してほしい。
- 関根委員
今回のアンケートは実態を如実に示している。生涯学習活動未経験者が26%、時間がない人が33%、きっかけがない人が29%もいる。生涯学習の認知はまだ不十分である。この会議では制度やインフラ整備に注力しているが、その前に意識向上を図らなければ全体の底上げは難しい。高校中退者から高齢者、障害者まで、立場ごとの考え方の違いがある。高齢者として感じるのは、「生涯学習」という言葉がまだ馴染んでおらず、行政からの「お仕着せ」に感じられる点である。生涯学習が各自のためになるという点に焦点を当て、個人がわくわくするような楽しさをもっと強調すべきである。行政の視点だけでなく、対象者の視点も考慮する必要がある。
- 会長
生涯学習は定着してきたと考えていたが、まだ課題を持つ人もいう指摘には同意できる。100%は難しいが、いつでも学べる仕組みを整えれば、アクセスは可能になる。この根本的な問題を踏まえ議論を進めたい。
- 久保木委員
生涯学習をしなかった理由について考察してみた。若者や母親はゲームやYouTubeに多くの時間を費やしている。これらが息抜きであり、夢中になってしまった結果、学習活動ができなかったという理由もあるのではないか。ゲームには人とのつながりも生まれる可能性がある。しかし、今回のアンケートにはこのような近年の傾向が反映されていないように思えるため、今後の進め方を考える上で発言した。
- 会長
ゲームに対し、高齢者には悪いイメージがあるかもしれないが、ICT技

術や交流の機会にもつながるため、必ずしも悪ではない。YouTube視聴も学習につながる可能性があり、判断は難しい。かつて公民館での活動としてダンスなどが批判されたこともあったが、実際は人との交流を深め、地域づくりに貢献していた。視点が変われば見方も変わる。今後の時代において、どの観点から生涯学習を捉えるべきか、その共通視点の妥当性につながる議論を深めてほしい。

山崎委員

なぜ学びたいか、どこから始めるかの問いに対し、趣味に近い楽しいものは継続性が高い。講座や習い事とは別に、活動型やイベント型で入り口を増やすことが重要である。既存の活動も多いが、活用されていないものも多数あるため、これらをうまくつなげれば学びの場は広がるだろう。参加のハードルを下げることも重要である。かつて入りやすかったダンスや卓球教室なども、良い形があれば生涯学習の観点は変わるだろう。

会長

新しい住民が公民館で何をして良いか分からず、料理教室から地域に馴染む例のように、どのような入り口を作るかが大きな課題である。

羽生田委員

共通視点の妥当性について懸念がある。学びたいが学べない人がいる一方で、必要性を感じない人もいる。「何もかも学びに結びつける考え方に違和感を覚える」というアンケート意見もあった。関根委員の「お上が上から」という指摘にも通じる。行政側としては、人生100年時代やウェルビーイングを踏まえ、誰もが幸福や生きがいを感じるために生涯学習が必要だというメッセージを伝える責務がある。意識向上という表現も「お上からの視点」になりかねないため、メッセージとして伝えていく姿勢が行政には求められるのではないかと。

事務局

共通視点をどう伝えるかは重要な論点である。生涯学習は主体的に学ぶ活動であり、ポイントを押さえた事業作りと同時に、県民に生涯学習の意義を伝えていく必要がある。強制的に受け取られると、「何もかも学びに結びつける考え方に違和感を覚える」という意見につながる。そのため、まとめた内容を市町村や県民に伝える際には、メッセージと事例を整理して提案する必要がある。

会長

客観的な視点を持ちつつ、現在の県民・市民へどうアプローチするかが重要である。

山口委員

生活との関係や必要性、学ぶ時間の有無について考える。若い母親たちが隙間時間にゲームやYouTubeを見ているが、これらは学びとは異なる視点だが、知識を深めたり興味を満たしたりする小さな学びである。例えば、英語教材アプリや料理動画の視聴などである。学びという言葉のハードルを下げれば、「私もやっている」と感じる人が増えるのではないか。

会長

生涯学習の定義が広がれば、カラオケも生涯学習とされたように、学習のハードルは低くなるはずである。日々の生活の中で適応していくための学びが本来の学習だと考えれば、もっと身近にあるはずだが、ハードルを高く捉えられると「やらされ感」につながる。

前川委員

婦人会の立場から意見する。前回の会議後、高齢者施設や地域包括支援センターなど、公民館とは異なる場所で活動する団体と話した。そこでは、高齢者が自発的に学ぶ場を設けていたり、韓国語教室を開いたりしているという。自分が知らなかっただけで、多様な場所で多様な学びが行われていると感じた。足が不自由な高齢者には送迎がある場所での学びの機会もある。生涯学習は教育委員会だけでなく、様々なところで広がっている。また、高校中退者からは地元の公民館に行きづらいという声があった。地元以外でも受け入れられる仕組みがあれば、参加機会は増える。特に音楽など、地元の団体には入りにくいという声もあり、多様なニーズに応えるべきだと感じる。

会長

デイケア利用者が「面白くない」と話すことがある。歌や塗り絵がつまらないと感じる人こそ、自身の生涯学習とは何かを理解し、主体的な学びにつながる機会が重要である。施設で歩行が制限されるなど、本当はしたいことができない状況は問題である。このような場でも生涯学習の支援がなければ、真の社会福祉にはならない。

土澤委員

今年の年輪ピックは、生涯学習を広める良い機会である。世代間交流を通じて、子どもが高齢者の知識から学び、高齢者が子どもから学ぶ機会となる。ボランティア参加を通じて、学びを実感できるだろう。弊社は埼玉県スポーツ少年団と連携し、子どもたちの健全育成に取り組んでいる。埼玉県のスポーツ少年団は参加者が多く、コミュニティも活発である。組織以外のコミュニティはメリハリを与え、利害関係のない人との交流は学び

を生む。生涯学習は「学習しなければ」と重く捉えられがちだが、人とのつながりから生まれる学びをさらに広げていきたい。

会長 生涯学習の理解促進が重要である。若い世代から高齢者まで、生涯学習がもっと身近なものだと捉えられるようにすることがポイントかもしれない。

森委員 日本は教育と福祉が分断されているが、生涯学習は両領域にまたがる概念である。デイケアの例では、スウェーデンでは高齢者が政治議論や異文化交流を行っている事例がある。これは、高齢者の知識や経験が社会に貢献し、自己肯定感を高める。日本も高齢化が進み、移民流入も増えるだろう。高齢者が持つ知識や文化を、例えば留学生や移民に教える機会があれば、日本への理解が深まり、文化の共有にもつながる。高齢者は身体的にしんどいかもしれないが、多くの知見を持っており、それが教育に活用されることは良いと考える。

会長 日本の社会教育の伝統を活かし、教え教えられる関係をさらに広げるべきである。

久保木委員 先の意見に同感である。「誰もが」という言葉は日本人だけでなく、日本に滞在する多様な人々を指し、「いつからでも」は高齢者も年齢に関わらず学べるという意味だと強く感じた。

会長 文部科学省もウェルビーイングや生涯学習に言及しており、縦割り行政の傾向は薄れている。そのような流れを捉え、新しい取り組みを進めることが重要である。

学びへの参加・継続という点で、高齢者や外国人だけでなく、若者や学生も考慮すべきである。社会教育や生涯学習を知らなければ、卒業後の学び方が偏る可能性もある。多様な人々が生涯学習に関われるようにし、彼らが抱える課題を深く理解する必要がある。高齢者のスマホ操作やAI利用の困難さは、人生100年時代において大きな問題である。社会を生きる私たちが、生涯学習を自身のものとするのが急務である。気軽に意見を出してほしい。

森委員 超高齢社会ではジェロントロジー（老年学）とエデュケーションを組み

合わせた分野も現れている。高齢者のICT支援研究は多いが、実際に街中で学べる場所は限られる。例えば、大学生が授業で高齢者へのICT指導法を学び、地域貢献するなどの取り組みは有効だろう。八百屋が来店できない高齢者への商品提供をテクノロジーで考えるように、事業のあり方も変わる。皆が意識を変え、働き方を変えることも学習である。新しい社会に適応すること自体が生涯学習の根底にある。社会全体が一体となって動くことが、大きな学習の渦となる。

谷野委員

ドコモの話があったが、地域では学生が高齢者にスマホの使い方を教えている。生涯学習指導員の経験から、田舎では高齢者が公民館に来られない場合、荷物を運んで軒先に集まり、手芸などを楽しんだ。高齢者は積極的に参加し、時にはこちらが学ぶこともあった。生涯学習の真骨頂は、集まった中から指導者が育ち、仲間が広がることであろう。しかし、面白いカリキュラムや指導者がいなければ、参加者は集まらない。指導者は偉い立場ではなく、寄り添って共に学ぶ姿勢が重要である。様々なジャンルの人々が集まり、多様なプログラムを組むのが良い。誰もが学習の中心になれるべきである。若い世代はスマホで学ぶが、高齢者は行動範囲が狭いため、社会福祉協議会など福祉関係との連携が不可欠である。

会長

公民館以上に福祉協議会が体操や手芸などを行う例もあり、どちらが社会教育活動をしているか不明瞭な状況もある。

岡野委員

学びを支えるには、共に学ぶ仲間が必要であり、教わりたい人に教える人が必要である。仲間作りには、個人の「好き」を見つけることが重要である。その「好き」を追求する中で仲間と学びが生まれる。県政サポートアンケートにあった「遠くに行けなくなる」という高齢者の声は切実である。ICTは有効だが、苦手な人が多い。専門ショップは高額で、補助金も難しい。そこで、できる人ができない人に教える場や、企業・大学との連携が必要となる。しかし、ICT活用で孤立化する人もいる。この表裏一体の関係をコーディネーターがバランスよく見極めることが重要である。

事務局

貴重な意見に感謝する。趣味的な活動の継続性が高いという意見や、「場」が多様化しているという点が参考になった。生涯学習推進指針の調査では、市町村によって生涯学習の認識に差があることも明らかになった。ウェルビーイングの観点から、個人の幸せだけでなく、人とのつなが

りが重要である。移民や高齢者と若者の交流など、つながりを作り、指導者が育つことは引き続き大切である。ICTは便利だが、個別学習に偏りがちである。ICTでの学びとリアルなつながりを作る学びをどう連携させるかが課題である。

会長 それは大きな問題であり、全ての対象に共通する課題だろう。

谷野委員 事務局の話聞いて、つながっていない市町村もあることに驚いた。生涯学習が教育委員会だけのものだと捉えられている現状がある。社会教育や生涯学習は相手があって育まれるものであり、単体ではできない。つながりを重視し、これからのあり方を考えるべきである。ネットやスマホの弊害で睡眠障害になる例もある。生涯学習を通じて、社会が健全な方向へ戻ることを期待する。

山崎委員 ICT活用について、関連業界の従事者として意見を述べる。つながりの点では、埼玉県で不登校支援に教育メタバースのような仮想空間を活用している事例がある。これは中間的な活用として有効だろう。高齢者やICTが苦手な人、あるいは集まって学ぶべき場合は、機材を近くに持っていか、公民館で集まって皆で使うのが良い。知っている人がいれば助け合える。地域によってはWi-Fiの問題があるが、ポケットWi-Fiなどで小さなコミュニティを作り、講座に参加する工夫も可能である。仮想空間の活用は、孤立化防止にもつながるだろう。

久保木委員 ICT活用だけで講座を見るだけでは、有料講座と変わらない。地域で行う生涯学習は、人と人とのつながりが重要である。そのため、ICTだけでなく、対面での交流も交え、必要に応じてICTを活用する、両方を組み合わせる形が最も良いと考える。

会長 その進め方が適切だろう。残り時間が少ないが、まだ発言していない委員がなければぜひお願いしたい。今回の議論で全ての論点が網羅されたわけではないかもしれないので、今日の会議を振り返って気づいた点があれば事務局に伝えてほしい。今日も活発な議論ができた。

時間が早いので、これにて閉会する。本日は、誰もが学び続けられる生涯学習社会の実現に向けて議論した。次回、次年度になるが、今回のまとめを基に議論する。宮崎副会長に感想をお願いします。

副会長

委員の皆様のご貴重な意見に感謝する。議会の話だが、埼玉県は学校施設を80年間利用する計画である。戦前は学校建設に国や県の補助がなく、皆が私財を投じた歴史がある。これは、昔も今も、教育へのアクセスが重要だと感じている証であろう。自分の親世代は黙々と本を読んでいたが、息子たちは「面白くなければ勉強じゃない」とゲーム化された学習をしている。時代は変わるが、教育を大切にする姿勢は変わらない。生涯学習の議論を通じて、誰もがアクセスできる社会の土壌ができていることを感じる。本日はお疲れ様でした。

会長

本日の議事は以上で終了する。第2回埼玉県生涯学習審議会を閉会する。委員の皆様、貴重な意見をありがとうございました。